周樹人・顧琅著『中国鉱産志』について（上）
――鉱産物の産地や説明文の材源を求めながら――

丸　尾　　勝

一、はじめに

周樹人は1902年南京の鉱務鉄路学堂を卒業し、渡日し東京の弘文学院に入学し、1903年『中国地質略論』（以下『略論』と略称する）を著し、『浙江潮第八巻』に発表し、そして、1906年に顧琅との共著の『中国鉱産志』（以下『鉱産志』と略称する）を出版した。この『鉱産志』の発表の趣旨は、『略論』と同じで、列国に侵略され、中国の豊富な石炭等の鉱産物が奪われていく中国の現状に危機を覚え、無能無策である清朝政府と抗議に立ち上がらない中国人に焦燥を覚え、まず、豊富な石炭や鉱産物などの産地や分布を示し、中国の地質や地相を講じて地質学等を興し、鉱産物の掘削、開発を促進し、産業を興し国力をつけようと図るものであった。

この両書はそれほど重視されていなかったのか、1952年唐弢により『魯迅全集補遺続編』(1) に初めて収められ、『略論』はやっと1981年版『魯迅全集第八巻』『集外集拾遺補編』に収められた。その後、『鉱産志』は共著ということもあるのか、2001年群言出版社劉運峰編『魯迅迭文全集』、2005年劉運峰編『魯迅全集補遺』にやっと補われ、そして、ようやく2009年人民出版社『魯迅著訳編年全集』に収められ、以降は2011年長江文芸出版社『大魯迅全集』、2012年人民文学出版社陳漱渝編『魯迅科学論著集』等に収められるようになった。

筆者は『略論』についての論文を発表した(2)。本論は、『略論』に引き続き『鉱産志』の、その執筆の意図、著者、共著の問題、内容、意義などについて、鉱産物に関わる言説、鉱産物の産地、その産地の説明文、及び、鉱産物の説明文の材源を求めながら探求する。

材源を求めるのは、作品の作成過程の追究により、また、作成過程に関連する資料の閲覧により作品をより深く理解でき、材料の取捨選択・解釈・表現の仕方の追究により著者の考え方により接近でき、著者の心情や思想をより明らかにで

きるからである。

管見によれば『鉱産志』についての論文は中国に三編程ある。周献本の『《中国鉱産志》版本資料』[3] は、題名の通りその四版のことについて詳しく論述していて、下記の「二（1）」では参考となった。劉書友の『魯迅と《中国鉱産志》』[4] と、郭志坤の『《中国鉱産志》と魯迅早期自然科学思想』[5] は魯迅とその著『鉱産志』を高く評価しているが、材源については一部示されている程度で、その具体的追究や他の材源への言及はない。

『鉱産志』は 2012 年人民文学出版社の『魯迅科学論著集』に収められた本文を用い、『略論』は 1981 年版人民文学出版社の『魯迅全集第八巻』『集外集拾遺補編』に収められた本文を用いる。

なお、原題、原文中に「支那」という言葉を用いている場合はそのまま記入する。

二、『鉱産志』について

(1)『鉱産志』の四版

『鉱産志』には四版がある。その表紙には『中国鉱産志』の書名が真ん中に書かれ、その上に「国民必読」、右肩に「江寧顧琅　会稽周樹人　合纂」とあり、左下に「附中国鉱産全図」とある。「初版本」には編纂者は「留学日本東京帝国大学顧君琅　及　仙台医学専門学校　周君樹人」とある。周樹人は 1906 年 3 月には「仙台医学専門学校」への退学届けが受理され、東京へ帰り、6 月に「独逸語学校」に籍を置く。従って、『鉱産志』の発行日 5 月 4 日には「仙台医学専門学校」の学籍はない。顧琅は、「東京帝国大学」へ留学したと言うが、この件には問題があり、「三（2）」で扱う。「出版者」は「榎本邦信」、「印刷者」は「並木活版所」で、「発行所」は「上海普及書局、南京啓信書局　日本東京留学生会館」である。

なお、『鉱産志』の表紙には「附中国鉱産全図」とあるが、実際には、『中国鉱産全図』は単独で発行され、その表紙の真ん中に「中国鉱産全図」と書かれ、その上に「国民必携」、右肩に「江寧顧琅　会稽周樹人　合纂」、左下に「附中国鉱産志」とあり、『鉱産志』と対になっている。「合纂」となっているが、図の左下には、「編纂兼繪図者　顧琅」と「顧琅」単独の名前が書かれ、印刷日、発行日は『鉱産志』（初版）とは異なっている。

「増訂再版」の表紙には、「初版」の「江寧顧琅　会稽周樹人　合纂」ではなく、

「農工商部　学部　鑑定」に取って代わられ、発行日が1907年1月14日で、「編纂者」が「留学日本東京帝国大学　顧琅　留学日本東京独逸語学校　周樹人」、「発行所」が「文明書局　普及書局　有正書局」に代わり、増訂されている。そして、「農工商部批」の見出しで文末が「右批学生顧琅准批」の広告が付き、また、「学部批」、「農工商部　学部鑑定」、「本書征求資料広告」の広告が付く。

「増訂三版」の発行日は1907年2月27日で、「増訂三版」は「増訂再版」を形式上内容上引き継いでいるが、唐弢が言うには訂正が非常に多く、『魯迅全集補遺続編』の『鉱産志』のテキストはこの「増訂三版」を基にして、誤字については「初版」などを参考にしたと言う[(6)]。

「第四版」は1911年10月20日「上海中華書局」発行である。

このような移行から、「初版」から「三版」までわずか十箇月程であることから多く購入されたこと、徐々に顧琅が多く関わったこと、「農工商部」や「学部」の関わりがあったこと、「再版」から発行所が中国のみになったことが伺える。

(2)『鉱産志』の内容、及び『略論』との内容上の関係

『鉱産志』の内容について、『略論』との異同に触れながら述べる。始めに『前書き』、馬良叙の『序』があり、次に、『例言』、『序論』と続き、その『第一章　鉱産と鉱業』は、中国の北部・中部・南部の地相、鉱物、鉱業の歴史と、鉱産や鉱業の現状について述べる。その現状は、中国の鉱産は豊かであるが、民営の鉱業はきびしく取り締まられ、人々は地気風水の説で採掘を邪魔し、掘削は児戯に近い仕方で、軟弱な清朝は無理強いする列国の言いなりであると批判している。『略論』にも同じような批判があるが、『鉱産志』の方がよりきびしい。『第二章　地質及び鉱産の調査者』は、『略論』の『第二　外国人の地質調査者』より少し詳しいが内容はほぼ同じある。このことから、『第一章』と同じくこの『第二章』も周樹人の執筆であると推定される。『第三章　中国地質の構造』の『第一節　地相』に相当する説明、並びに、その『中国地相図』にあたる地図は『略論』にはない。その『第二節　地質上の発達史』に相当する説明は『略論』にあるが、区分の仕方が異なる。『第四章　地層の分布』は『略論』と同じ箇所もあるが、異なる箇所もある。

次が『本論』で、『第一章　直隷省鉱産』から『第十八章　雲南省鉱産』まで

18 省別に 10 種の「金属鉱」と 20 種の「非金属鉱」に分け、鉱産物の産地名 1200 程を列挙している。これらの各種鉱産物名とそれらの産地の数を一覧表にしたものが、『附録』の『中国鉱産一覧表』であり、また、これらの鉱産物とその主な産地を適宜地図に表したものが、『中国鉱産全図』である。『略論』における 9 省の 36 炭田名（「満州」を除く）は、地名の示し方が異なる所もあるが、すべて含んでいる。『鉱産志』は『略論』の内容を一部削除し、一部変更するが、大部分は継承し、鉱産物種と鉱産地を大きく拡充し、新説を取り入れて、充実した豊富な資料にした。

最後尾に、『附録』として『中国地相図　山系と水系』、『地質時代一覧表』、『中国鉱産一覧表』を加え、さらに、『上海普及書局新書出版広告』、『江寧顧琅　会稽周樹人合著』、『農工商部　教育部鑑定』、編纂者の『本書の資料募集の広告』等の広告を付けた。『鉱産志』は、「農商工部・教育部」の推薦書で、「国民必読書」とされ、「中学堂の参考書」となっていた。

『鉱産志』の執筆の趣旨については、上記「一、はじめに」で述べた。

なお、『地質学残稿』という残稿がある。『魯迅大全集学術編』によれば、「地殼第二　壱石　一火成石　二水成石　三変成石　弐地殼の構造　一　二気　三生物」という目次で、手稿で、句読点があり、1903 年頃作成とわかっている [(7)]。

三、『鉱産志』の執筆者について

(1) 1902 年以降の周樹人

周樹人の 1902 年『鉱務鉄路学堂』卒業以降の経歴を『魯迅年譜』より抜き書きする。

1902 年 1 月『鉱務鉄路学堂』を卒業。3 月張協和・芮石臣（顧琅）等と日本留学に出発。4 月東京の『弘文学院』に入学。顧琅は学友。1903 年 6 月『斯巴達之魂』と『哀塵』発表。10 月『説鈤』と『中国地質略論』（『浙江潮第八期』）発表。10 月『月界旅行』出版。12 月『地底旅行第一・二回』発表。1904 年 4 月『弘文学院』卒業。7 月祖父死亡。9 月『仙台医学専門学校』入学。『北極探険記』、『世界史』、『物理新詮』中の『世界進化論』、『元素周期則』を訳すが訳稿失われる。1905 年春『造人術』訳書発表。11 月日本政府、清国の要求に従い『清国留学生取締規則』を公布、留学生授業ボイコットし抗議する。1906 年 3 月『仙台医学専門

学校』への退学届けが受理され東京に行く。4 月『地底旅行』出版。5 月顧琅との共著『中国鉱産志』出版。6 月ドイツ語学校に籍を置く。7 月朱安との結婚のため帰国、数日して周作人を伴って東京へ。1907 年『新生』の出版を取りやめる [8]。

周樹人は南京の『鉱務鉄路学堂』の実習で青龍山の炭鉱に行き、『雑記』に、経営がうまくいかず、坑道の中はひどい様子で工夫は亡霊のような面持ちで働いていたと述べる [9]。この体験が『略論』、『鉱産志』の執筆の遠因となる。また、上記のように、科学関連の訳業、著作、出版、学習が非常に多い。科学の考え、見方の導入の必要性、科学の力による迷信や地気風水説の打破、科学による興産などにおいて、科学を重んじていたことがわかる。『略論』と『鉱産志』の執筆もその一つの現れであった。

(2) 顧琅

『民国人物大辞典』によれば、「顧琅は元は原姓は芮、名は体乾、後に姓を顧、名を琅と改め、字を石臣とする。江蘇省江寧の人。1879 年生。南京の路鑛学堂に入学、日本へ留学、東京帝国大学に入学し工学士の学位を得る。直隷高等工業学堂教務長、奉天本渓湖煤鉱公司技師、北京政府農商部第二区鉱務監督、農商部技監、実業部参事歴任。1936 年 6 月国民政府実業部技正赴任。『中国十大鉱廠調査記』を著す。」と紹介する [10]。

上記に「東京帝国大学に入学し工学士の学位を得る」とあり、また、『鉱産志』の『附録』の『上海普及書局新書出版広告』（1906 年「初版」）にも、「留学日本東京帝国大学顧君琅、及び、仙台医学専門学校周君樹人」とある。しかしながら、「東京帝国大学」の本科生、選科生の在学名簿、卒業生名簿には彼の名前は見当たらない。当時「冶金・採鉱学科」は同大学「工科大学」にあるが、その学科だけでなく、他の「工科大学」の学科、「理科大学」、他にも彼の名前は見られない。そして、彼が著した『中国十大鉱廠調査記』の『自序』には、「私は幼い時より我が国の鉱産は世界一だとよく聞いていた。長ずるに及び鉱産学が好きになり、江南鉱路学堂を卒業（1902 年）後以来ずっと日本に留学する（1904 年）こと八年、深く研究することを望んだ。戊申（1908 年）帰国する。」とあり [11]、1902 年から 1908 年まで鉱産学を学んだとあるが、「鉱路学堂卒業」のことを述べるのであれば、「東京帝国大学卒業」のことを記述するはずである。その『中国十大鉱廠調査

記』の 5 人の『序文』には彼が「東京帝国大学卒業」したとは紹介していない。『鉱産志』の陳漱渝の『前言』にも、「東京帝国大学」で学んだとは書いていない。周樹人の場合、清国公使楊枢が「仙台医学専門学校」に周樹人入学の「照会状」を送り、「仙台医学専門学校」は 1901 年発令の「文部省直轄学校外国人特別入学規定」(12) に拠り、彼を入学金や授業料免除で無試験で入学させた。顧琅の場合も、この「外国人特別入学規程」等により「東京帝国大学」で学習できるような身分であったかと考えられる。そうであれば、清朝の役人が『鉱産志』の『附録』で「東京帝国大学入学」と述べることができ、本科生ではない顧琅は「東京帝国大学」を卒業する必要はなく、鉱山学等を学習できたと考えられる。

(3) 執筆者に関わる問題

『鉱産志』には江寧の顧琅と会稽の周樹人の共著と書いてある。しかし、竹内好編の『魯迅選集第十三巻』『魯迅著訳書目録』に、『鉱産志』は、「顧琅と共編になっているが、実は魯迅一人の編訳。東京で印刷。再販（同年 12 月）では多く訂正され、～弘文学院在学中（1902～4 年）に執筆したもので、1903 年『浙江潮』第八期に発表した『略論』は、この要約だと言われる。」と述べる (13)。これは、唐弢の『魯迅全集補遺続編』『編校後記』（1952 年）に拠っているのであろう。唐弢は『編校後記』で次のように述べる。顧琅と周樹人が編纂人である『中国鉱産志』（第三版）が見つかり、北京に寄贈され、同時に、沈祖緜は所蔵の『鉱産志』の初版本を魯迅夫人に寄贈し、顧琅と周樹人共著の『鉱産志』は二人が弘文学院（原文は「宏文学院」）で学んだ時期の著作であると述べている。しかし、周建人は実際は魯迅一人で書いたもので、また、周作人はこちらに手紙を寄こして『鉱産志』は署名は顧琅と一緒であるが、内容は全部魯迅の執筆であると書いていると言う。そこで、唐弢は『略論』と『鉱産志』とを対照し、内容と文章のスタイルとは完全に一致していると見て魯迅一人の作品であると確認したと述べ、また、『略論』は『鉱産志』の要約本（原文は「缩篇」）で、文字は詳細と簡略の違いはあるが、内容は大体一致していると言う (14)。また、同書『重訂魯迅著訳書目』の『著訳部分』で、『鉱産志』は、「江寧の顧琅との合纂という名目ではあるが、実は周樹人一人の執筆で、全書埋蔵鉱石の所在と採鉱の経過を述べ立て、再版時、多く訂正し、鉱山の主権が略奪されたかどうかに意を注いでいる。」と述べている (15)。

周作人はその『魯迅の故家』（1981 年）で、「南京の鉱務鉄路学堂の学友で一緒に留学に来たのは、張邦華、伍崇学、顧琅の三人であった。張君だけが時々訪れた。顧琅はかつて『鉱産志』の編訳を周樹人に頼み、時に連名で出版したが、以降は行き来がなかった。」[16] と言う。周作人は、1906 年 7 月周樹人が朱安との結婚のため帰郷した時周樹人と一緒に東京に来ているが、この時期には『鉱産志』の初版は既に出版されているので、どこまで真相を知ることができたであろうか、疑問が残る。

しかし、周樹人と同学で部屋も同室であった沈瓞民は、上記の、唐弢の『魯迅全集補遺続編』『編校後記』の周樹人一人の作品であるという説明文を取り上げて、『鉱産志』は弘文学院に在学中に二人が書いた作品で、顧琅の書いた文章を周樹人が書き直し色を付けることがあったと事情を述べている[17]。この書き直したということによって周樹人一人が書いたと語られ、周作人や周建人のように誤解の原因になり、また、唐弢の言う「内容と文章のスタイルは完全に一致している」ことにもなる。また、前段落の周作人の引用文の中の、「顧琅はかつて『鉱産志』の編訳を周樹人に頼み」ともつじつまが合う。

顧琅が『鉱産志』に関わったことは、次の点からもわかる。初版の『中国鉱産全図』（1906 年）の表紙には「江寧顧琅　会稽周樹人　合纂」となっているが、地図の左下には、「編纂兼繪図者　顧琅」と単独になっている[18]。このことは、唐弢は『中国鉱産全図』を当時まだ見ていないので知らないはずである[19]。『中国鉱産全図』が発見されたのは、劉書友の『魯迅と《中国鉱産志》』に拠ると 1959 年と言う[20]。

また、再版には、『農工商部批准』に「右批学生顧琅准此」と顧琅単独の名があり、同じく再版には、『農工商部　学部鑑定』には、「訂正再版《中国鉱産全図》」は「留学日本東京帝国大学　顧琅編纂」であるとし、顧琅単独の名前になっている。

また、顧琅の方が時間的に余裕があったことが『鉱産志』への関わり、対応を多くしたと考えられる。周樹人は、上記「三（1）」の通り、1904 年『仙台医学専門学校』の入学から 1906 年 4 月退学まで仙台で暮らし、医学の学習に忙殺され、『鉱産志』に関わる時間的余裕は多くなかったと思われる。一方、顧琅は上記「三(2)」に記したように、『東京帝国大学』の身分の問題はあるものの、明らかに顧琅の方がその方面の学習や資料収集できる環境にあり、時間的余裕があったと推

測する。一方、周樹人は『略論』と『鉱産志』で侵略に無能な清朝政府を批判し、「光復会」に入会し、反満運動に参加していた。また、1904 年 9 月から 1906 年 3 月まで東京にいなかった。このような事情を考えると、顧琅が『鉱産志』に関わっていたからこそ、清朝政府の「農工商部」や「学部」からの推薦を受けられ、出版できたと思われる。1907 年 1 月発行の『鉱産志』（増訂再版）の表紙には、「初版」の「江寧顧琅　会稽周樹人　合纂」はなく、「農工商部　学部　鑑定」に取って代わられ、そして、『農工商部批』の文末に「右批学生顧琅准批」と書かれたことは、この時期顧琅が主になって取り組み、対応したことを物語っているのではないか。

以上のことを総合すると、文章の多くに周樹人の手が入ったとしても、『鉱産志』は周樹人一人の作ではなく、「共著」と書いてある通り、やはり周樹人と顧琅の共著とするのが真相ではないかと考えられる。

なお、周樹人と顧琅とは鉱務鉄路学堂と弘文学院の学友で、『鉱産志』を共に著したが、沈瓞民は顧琅のことを「顧琅の人柄はぐずぐずとしていて、『文は人なり』で、文筆はうまくない。」と言っている [21]。また、『魯迅日記』によれば、二人は、1912 年 5 月 22 日、1915 年 11 月 20 日、21 日に会っている。1912 年 5 月 21 日の『魯迅日記』には、「午前顧石臣来部するが、謝絶して会わず。」、22 日は、「晩顧石臣来る。ぐずぐずと話を続け、長居の末ようやく帰る。」とある [22]。ここからわかることは、共著という取り組みは別であるが、魯迅と顧琅はどうも気が合わなかったようである。

四、『序論』の鉱産に関わる説明文の材源

(1) リヒトホーフェンの鉱産についての言説について

『鉱産志』の『例言』には、「中国の地質について中国では今までにその研究はない。その最も詳しい研究者はリヒトホーフェン（Richthofen）であるが、その研究は偏っていて完全ではない。」と言う [23] が、『鉱産志』の『序論』には彼の資料を基にした言説があり、以下に取り上げる。

（ア）「中国は世界一の石炭国」（『序論』『第二章　地質及び鉱産の調査者』）

この点については、『略論』についての拙論で取り上げ説明した [24]。ここではその要約を記す。リヒトホーフェンは中国を「世界第一の石炭国！」と言ったと

いうが、彼は、「世界第一の石炭国」と言える程の中国全体の埋蔵量について述べたことはない。山西省だけの炭田で世界に数千年も供給することができるといった彼の言説が「世界第一の石炭国」と解釈され、このような解釈が流布した。

（イ）「膠州の占拠」（『序論』『第二章　地質及び鉱産の調査者』）

この点もまた拙論で取り上げ説明した[25]。ここではその要約を記す。リヒトホーフェンが、山西はとりわけ石炭が豊富であるが、鉱業の盛衰は何よりも輸送の便宜にかかり、膠州湾は中国全北半部における最大にして最良の海港で、海上・陸上・水上輸送の点でも最も有利な位置を占めているので、この膠州を扼しさえすれば、山西だけでなく、北部の大平原を制することができると述べた。この考えを要約した言説が流布し、この提言によりドイツ艦隊は膠州を占拠した。これらの言説の基はリヒトホーフェンの言説である。

（ウ）リヒトホーフェンの言説を引用した他の説明文

『鉱産志』の『序論』の『第四章　地層の分布』『第二節　太古層』の「カンブリア層」、「デボン層」、「石炭層」の三箇所の説明文[26]は、リヒトホーフェンの名を挙げ、彼の言説を引用している。始めの二箇所は、組み合わせ方、詳しさやドイツ語の専門用語の挿入などにおいて異なる所があるが、『略論』の『第三　地質の分布』の『（二）古生代』にほぼ同内容の箇所がある[27]。ということは、これらの材源は、『略論』発表の1903年以前の地質学者がリヒトホーフェンの言説を引用した資料である。そして、「石炭層」には、リヒトホーフェンの「山陝炭田」についての言説を引用した説明文がある[28]。「山陝炭田」とは山西省と陝西省の地続きの炭田を指すのだろう。

『略論』、『鉱産志』ともにリヒトホーフェンを、偏向や不完全さがありながらも中国地質学の第一人者と認めて、「世界一の石炭国」、「膠州の占拠」や「太古層」についてリヒトホーフェンの資料に拠り要約した言説を引用している。

五、『本論』における18省の鉱産物の産地の主要な材源

(1) 材源の主要な経路

（ア）パンペリーの『清国主要鑛産頒布図』について

『鉱産志』の『附録』の『江寧顧琅　会稽周樹人合著』にも、「『中国鉱産全図』広告」にも、『中国鉱産全図』の材源は日本の現地派遣員の調査、リヒトホーフェ

ンの資料、パンペリーの『清国主要鑛産頒布図』と述べている。これらは『中国鉱産全図』の情報の材源であるが、『中国鉱産全図』の本体の資料である『鉱産志』の主要な材源でもある。逆に言えば、『鉱産志』の主な鉱産物の主な産地を地図に表したものが『中国鉱産全図』である。リヒトホーフェンの資料については、一部ではあるが、上記の「四」で既述した。

日本の地質調査所は、『清国及韓国主要鑛産頒布圖説明　附清国主要鑛産地名表』において、「清国主要鑛産頒布圖ハ『パンペリー』氏支那、満州、日本地質調査報告ニ據リテ編纂シ該書掲クル所ノ産地名ハ別表トナセリ、該表ハ原ト大清一統志ニ基ケルモノナルモ之ヲ其原書ニ比スルニ盡ク符合セス、又大清一統志ニハ岩石、鑛物、金属混雑シテ盡ク其學名ヲ確知シ難ケレトモ『パンペリー』氏ハ盡ク鑛物ノ種類ヲ区別セリ。」(29) と説明し、『清国主要鑛産地名表』と題して、18 省の鉱産物を金属鑛産と非金属鑛産に分け、また、省別にその産地名を列挙し、後ろに『清国主要鑛産頒布圖』という図を付けた。上記の説明文を解釈すると、『清国主要鑛産頒布圖』はパンペリー著の『支那、満州、日本地質調査報告』に拠って地質調査所が編纂したもので、「該書」即ちパンペリー著の『地質調査報告』が掲載した産地名は『別表』にまとめ、この「該表」即ち『別表』は元々『大清一統志』に拠ったもので、『別表』を「原書」即ち『大清一統志』と対照すると尽く符合し、『大清一統志』の岩石、鉱物、金属の学名は尽く確知しがたいが、パンペリーは尽く鉱物の種類を区別したということになる。

この「パンペリー氏支那、満州、日本地質調査報告」とは、パンペリー著の『中国、モンゴル、日本における地質学的調査』（1866 年）（以下『地質学的調査』と略称する）である。この著書の『第六章　中国本部の一般地質学について』で、「これらの産地は、すべてが実例で、そうでなければそのように書かれていて、中国の地理学の著作、特に『大清一統志』と各省の地理誌から採録されたものである。」(30) とあり、それに続いて、『中国の、石炭、明礬、石灰岩、大理石、化石、洞窟、鍾乳石等の産地表』(31)、『塩の産地と掘削油井地の表』(32)、『砂金と金坑の表』(33) という表がある。たとえば、「石炭」についてはその産地が各省別に記され、その所在等や、「Coal」（石炭）、「Anthracite」（無煙炭）、「Brown Coal」（褐炭）、「Bitaminous Coal」（瀝青炭）の区別も記されている。パンペリーは帰国後持ち帰った石炭の分析を依頼し、その結果を、『補遺 NO.2 中国と日本の石炭の分

析』[34]に掲載している。たとえば、「順天府房山縣無煙炭」について、「V.TASHITUNG mine (Fangshan S.W. of Peking) Hard Anthracite, coated with some carbonate. Carbon…86.62 Volatlle matter…4.64 Water…2.64 Ash…6.10/100.00」と「無煙炭」の説明をしている[35]。『第十章』にも、「次の鉱産物のリストと産地は、完全を期すために多くの省とその種類のそれらが調べられたけれども、多大な役割を占める中国の地理学書、『大清一統志』から編集されている。」とある[36]。続いて、『第六章』には、『有用鉱産物の産地のリスト』があり、「鉄」、「銅、銀、鉛、錫、水銀」、「各種鉱産物」の、各省別の産地名が記載されている[37]。これらの表がパンペリーがまとめた『別表』で、以下『別表』と呼ぶ。

この『別表』では、前段落での例の「順天府房山縣無煙炭」を、「Shuntien Fangshan H (順天府房山縣). Anthracite (無煙炭), S.W. (南西) 40 li (40 里) at Hwanglung Mt. (黄龍山), white marble (大理石)」と示し、これは、『大清一統志』の「煤　房山縣産」「黄龍山　在房山縣西稍南四十里山下有大石碣前産青白石後産白玉石」と一致している。このように、パンペリーは鉱産物、その産地、その位置などを『大清一統志』などから採録し、それらに科学的分析を施し分類し整理し『別表』にまとめた。パンペリーが『大清一統志』から採録したことは、日本の地質調査所が『清国及韓国主要鑛産頒布圖説明』で、パンペリーの『地質学的調査』の『別表』は、主として『大清一統志』を材源とし、それと「盡く符号」し、しかも、鉱産物の種類を正確に区分けしていると述べていること、及び、パンペリー自身が『大清一統志』や地方誌から採録したと述べていることからもわかることである。

そして、このパンペリー著の『別表』に拠って、地質調査所（日本）は「清国主要鑛産頒布圖」を作成したが、これが「パンペリーの『清国主要鑛産頒布圖』」である。そして、パンペリー著の『別表』に拠って各種鉱産物の産地の表として地質調査所が作成したものが、『清国及韓国主要鑛産頒布圖説明　附清国主要鑛産地名表』のその『清国主要鑛産地名表』（1902 年）である[38]（以下『地名表』と略称する）。従って、パンペリー著の『別表』と地質調査所作成の『地名表』とは、詳細と簡略や、英語と日本語の違いはあるが、ほとんど同じ内容である。そして、『鉱産志』は『地名表』からその表示形式を取り入れ、また、鉱産物名と鉱産地を採録している。

その『大清一統志』は、『唐書地理志』などの旧書や地方誌から採録し、行政区分別に、［土産］や［山川］等の項目に鉱産物名とその産地等を記載している。そして、地質調査所は「尽く符号」と言うが、調べてみると、『大清一統志』には、「今は廃する」、「久しく聞かない」と書かれている所もあり、廃坑なのか鉱脈がないのかわからない所もあり、事情で採録しなかった所もあり、見落とし、漏れも出てくる。そこで、『鉱産志』は、後述するが、『大清一統志』や地方誌からそのような鉱産地を拾い出している。

つまり、顧琅・周樹人著の『鉱産志』の鉱産物名と鉱産地は、18 省別、金属非金属種別、鉱産物種と同じ表示形式である地質調査所作成の『地名表』を主要な材源とした。この『地名表』はパンペリー作成の『別表』から採録し、その『別表』は『大清一統志』や地方誌から採録していて、その『別表』は『大清一統志』や地方誌に拠る。その『大清一統志』は旧書や地方誌に拠る。また、『鉱産志』は、パンペリーが『大清一統志』から採録しなかった所や漏らした所を拾い上げ採録している。よって、『大清一統志』から『別表』へ、『別表』から『地名表』へ、『地名表』から『鉱産志』への過程が主要な材源の経路になる。

以上のことを、以下の「五（2）」において、18 省の内 2 省、鉱産物として 2 種類を代表として取り出し調べ、また、実例を出して、確認し、説明していく。

（イ）パンペリー

パンペリー著の『アメリカ、アジア横断』[39] によれば、パンペリーは 1863 年 5 月揚子江上流を探索した後、天津、北京を訪れ、翌年日本に行き、11 月に北京からゴビ砂漠を抜け、1865 年 1 月イルクーツクに達し、シベリアを横断し、モスクワに行った。このように、中国を通り過ぎていくような旅であった。その名前は、リヒトホーフェンの著書にたびたび引用されているように、『地質学的調査』等を著して中国地質学に貢献した。

（ウ）『大清一統志』

『大清一統志』は、勅命によって編纂された清代の支配地域の総合的地誌で、第一次は徐乾学等の撰で全 356 巻 1743 年に完成、第二次は和珅等の撰で全 424 巻 1784 年完成で、第三次は穆彰阿等の撰で全 560 巻 1842 年完成（『嘉慶重修一統志』）である。本論文では第二次の『欽定大清一統志』を用いた。第三次の『嘉慶重修一統志』を用いても［土産］や［山川］等は全く同じである。鉱産物名、産

地名、その説明は、各府州県の［土産］［山川］等の項目に書かれ、「銀場」「鉄冶」「塩場」などは［古蹟］［関隘］に記されている場合がある。その産地や説明は、旧書の『漢書地理志』、『唐書地理志』、『元和志』、『太平寰宇記』、『宋史地理志』、『明統志』や地方誌などから採録していて、そして、「今廃」や「久不聞」といった現状も記述している。

(2)［山西省］、［浙江省］、［銀鉱］、［炭鉱］の鉱産物の産地について

『鉱産志』の『本論』では、10種の金属鉱、20種の非金属鉱に分けて1200程の鉱産地を列挙している。『鉱産志』（K）の各種鉱産物とその産地、この材源である地質調査所の『地名表』（S）の鉱産物と産地、この『地名表』の材源であるパンペリー著の『地質学的調査』の『別表』（P）の鉱産物と産地、その『別表』の主とした材源である『大清一統志』（D）の鉱産物と産地、これらの関係を調べてみる。地域18省、鉱産種30種の内、代表として北中国の［山西省］と南中国の［浙江省］、金属鉱の［銀鉱］と非金属鉱の［炭鉱］を取り上げ、また、一つの産地について、『鉱産志』、『地名表』、『別表』、『大清一統志』のそれぞれの表示の仕方を較べてみる。周樹人の『略論』の「石炭」の産地は、『鉱産志』にも全て含まれているが、『略論』にはRの符号を当てる。

なお、それぞれの鉱産地や説明文の引用元については調べることができることもあり、本論文の「注釈」には記さないが、『大清一統志』『浙江通志』については、その項目の［土産］［山川］［物産］を、また、「銀場」「鉄場」「塩場」などが記入されている［古蹟］［関隘］をその箇所に記す。

（ア）［山西省］の鉱産物について

『鉱産志』の『第二章　山西省』に、金属鉱が6種、42箇所、非金属鉱が13種、59箇所、計101箇所が記載されている。

『鉱産志』（K）における山西省の鉱産物について、Kの数値は『鉱産志』の産地の数、次のSの数値は『地名表』の産地の数、S（K）の数値はS内でKと一致している数、Pは『別表』の産地の数で、P（K）、P（S）はP内でそれぞれK、Sと一致している数、Dは『大清一統志』の産地の数で、D（K）、D（S）、D（P）はそれぞれD内でK、S、Pと一致している数である。Kが基準で、それぞれの％はKの全数に対しての割合を示す。Rは『略論』の中の山西省の炭田の数である。た

だし、これらの調査に挙げる数字には、「今廃」「經久廃」「封閉」と採録してよいか判断に迷う所、問題がある所などがあるが、『鉱産志』に従う。なお、行政単位名の変更などによる見落としや、数え違いがあるかもしれない。以下、（イ）［浙江省］、（ウ）［銀鉱］、（エ）［炭鉱］でも同じように集計する。

［山西省］「銀鉱」K2，S2（K2），P2（K2，S2），D2（K2，S2，P2）。「銅鉱」K9，S9（K9），P9（K9，S9），D8（K8，S8，P8）。「砂金」K1，S記載なし，P記載なし，D記載なし。「鉛鉱」から「水晶」まで省略。「琥珀」K1，S1（K1），P1（K1，S1），D1（K1，S1，P1）。「硫黄」K2，S0，P0，D0。「石油」K6，S・P・Dは記載なしである。

計K101，S65（K63），P67（K63，S63），D71（K67，S51，P54）。S/K=64％，S（K）/K=62％，P/K=66％，P（K）/K=62％，P（S）/K=62％，D/K=70％，D（K）/K=66％，D（S）/K=50％，D（P）/K=53％。ただし、「銅鉱」K6，S9（K6），P9（K6，S9），D3（K1，S3，P3）、「砂金」K4、S記載なし、P記載なし、D記載なし、と記載されているが、「沙金」の「澤州陽城縣」、「絳州聞喜縣」、「平定州盂縣」は、S『地名表』とP『地質学的調査』では「銅」になっていて、また、D『大清一統志』でも、「絳州聞喜縣」、「平定州盂縣」は「銅」の産地になっていて、「銅鉱」の誤記とした。また、R6（「東南部炭田、西南部炭田、五台縣、大同寧武府間炭田、中路、西印子」）の地域名の所は照合が困難である。

（イ）［浙江省］の鉱産物について

［浙江省］の 8 種の金属鉱 47 箇所、8 種の非金属鉱 24 箇所、計 71 箇所が記載されている。Rは『略論』の符号で、R6 は、地域名の所は照合困難である。集計結果のみ記す。計K71，S37（K35），P37（K36，S36），D43（K39，S17，P19）。S/K=52 ％，S（K）/K=49 ％，P/K=52 ％，P（K）/K=51 ％，P（S）/K=51 ％，D/K=61％，D（K）/K=55％，D（S）/K=24％，D（P）/K=27％。

（ウ）18 省の［銀鉱］について

18 省の［銀鉱］について調べて集計し、その結果だけを記す。計K147，S60（K60），P59（K59，S59），D113（K112，S51，P50）。S/K=41％，S（K）/K=41％，P/K=40％，P（K）/K=40％，P（S）/K=40％，D/K=77％，D（K）/K=76％，D（S）/K=35％，D（P）/K=34％。S『地名表』は、「広東省」、「広西省」、「雲南省」の資料が欠落しているが、SとPとは、他の省では 1 省だけが 1 違うだけで、他は

同じであることから、これらの3省でも同じであると推定した。

（エ）18省の［炭鉱］について、並びに『略論』の［炭田］について

同じように調査し集計し、結果だけを記す。K154，S58（K57），P58（K57，S55），D36（K33，S28，P27）。S/K=37%，S（K）/K=37%，P/K=37%，P（K）/K=37%，P（S）/K=36%，D/K=23%，D（K）/K=21%，D（S）/K=18%，D（P）/K=17%。

K『鉱産志』には、「満州」の7箇所は除いて、R『略論』の9省の36の「炭鉱」（中に3地域を含む）がすべて入っている。たとえば、『略論』の「山東省」の「沂州、新泰縣、莱蕪縣、章丘縣、臨淄縣、濰縣、博山縣」は、『鉱産志』の「沂州府、泰安府新泰縣、泰安府莱蕪縣、済南府章丘縣、青州府臨淄縣、莱州府濰縣、青州府博山縣」にそれぞれ一致している。『略論』の他の省も同様である。これらは、リヒトホーフェンの資料、あるいは、その資料を材源とした資料から採録している。従って、『大清一統志』、『別表』、『地名表』から『鉱産志』に採録する主要な材源の系統とは異なる。

（オ）分析、考察

(a) K『鉱産志』とS『地名表』

［例1］［山西省］について、K『鉱産志』は計19種101箇所で、S『地名表』は計14種65箇所で、『鉱産志』と一致するのは14種63箇所、一致率は62%で、「石油」を除くと一致率は66%になり、『鉱産志』の主要な材源は『地名表』である可能性が高い。［浙江省］については、K71，S37（K35），S（K）/K=49%で，『鉱産志』の49%が材源となる『地名表』が主要な材源である可能性が高い。［銀鉱］は、『鉱産志』の147の内、一致率40%が主要な材源の『地名表』から採録されている。［炭鉱］は『鉱産志』の154の内、一致率37%が主要な材源の『地名表』から採録されている。下記の（d）［例16］で説明するが、これらの割合はもっと上がる。

［例2］［山西省］の「銀鉱」は、K2，S2（K2），P2（K2，S2），D2（K2，S2，P2）で、すべて2で、D2からP2へ、P2からS2へ、S2からK2への移行が考えられる。「銅鉱」も同じで、K9は、P9から取り入れたS9を採録している。「琥珀」も同じで、K1は、P1から取り入れたS1を採録している。そして、「S（K63）」の「63」はSの内Kの産地名と一致する数を表すが、［山西省］のKは101であるが、S（K63），P（K63），D（K67）の数がほぼ同じであることは、P『別表』がD

『大清一統志』から採録し、S『地名表』がP『別表』から採録し、K『大清一統志』がS『地名表』から採録したことが考えられる。また、［浙江省］のKは 71 であるが、S（K35），P（K36），D（K39）の数もほぼ同じで、同じことが考えられる。

［例 3］［山東省］「銀鉱」K「沂州府兰山县」、S「沂州府蘭山縣」、P「ICHAU（Fu）Silver at Mt. Pau 90 li S.W. of LANSHAN（hien）」、D［山川］「寶山　在蘭山縣西南九十里府志上有洞穴数区産金銀鉱石」。K「沂州府兰山县」の、他の資料の表示の仕方を示したが、明らかにPはDから山の名や位置、鉱産物名、所在地を採録し、SはPから産地名などを採録し、KはSからそのまま採録していることが伺える。

［例 4］『鉱産志』の［山西省］の「石炭」20 箇所の内 12 箇所が『地名表』と一致し、その中の 9 箇所全部は「無煙炭」（原文は「无烟煤」）と注されていて、『地名表』にも、すべて「無煙炭」と注されていて、『鉱産志』が『地名表』を材源とした例である。

（b）『地名表』と、『地質学的調査』の『別表』

［例 5］［山西省］において、S『地名表』65 の産地は、P『別表』66 と、数、産地名がほとんど同じである。「鉄」、「明礬」、「ヒ素化合物」、「緑番」の産地数が一、二箇所違うだけで、鉱産物の種類、産地名、それらの掲載の順番も同じである。つまり、『地名表』は、『別表』の種類、産地名をそのまま採録している。［浙江省］も、S37（K35）、P37（K36、S36）と、また、「銀鉱」もS60（K60）、P59（K59、S59）と、また、「炭鉱」もS58（K57）、P58（K57、S55）とほとんど同じで、『地名表』は『別表』から鉱産物種や産地名をそのまま採録していることが伺える。

［例 6］［山西省］『地名表』の「鉄鉱」の産地名を「　」で、『別表』のそれを（　）で示すと、「太原府太原縣」（TAIYUENFU TAIYUEN hien）、「太原府榆次縣」（TAIYUEN YUTSE hien）、「平陽府曲沃縣」（PINGYANG KIUHYU hien）、……となり、一致し、『地名表』は『別表』から採録していることが伺える。

［例 7］［山西省］「銅」は、前記［例 6］のように表示すると、「代州（青色及緑色炭酸銅）」（TAI chau Blue and green carbonues of copper）で一致し、『地名表』は、『別表』からそのまま採録したことが伺える。

［例 8］［山東省］「銀鉱」K「沂州府蒙阴县」、S「沂州府蒙陰」、P「In UNGYING

（hien），Silver at Mt. Leanghien 60 li N.W. of city.」、D［山川］「両縣山　在蒙陰縣西北六十里縣志一名龍亭洞東南属蒙陰西北属新泰山頂有銀鑛」。ここも、『別表』は、鉱産物名、県名、山名、山の位置を『大清一統志』から採録し、『地名表』は鉱産物名とその所在を『別表』から採録している。上記の［例 3］も同じことである。

(c)『地質学的調査』の『別表』と『大清一統志』

［例 9］「五（一）（ア）」で述べたように、パンペリー自身が『大清一統志』や地方誌から採録して『地質学的調査』の『別表』を作成したと述べている。また、地質調査所の『清国及韓国主要鑛産頒布圖説明』も、パンペリー作成の『別表』は『大清一統志』に拠り、「盡く符号」と述べている。このように、パンペリーは鉱産物や産地などの情報は『大清一統志』等に拠り、パンペリ―著の『別表』は、『大清一統志』なくしては作成できなかった。

ただ、たとえば、山西省「P67、D（P54）」、浙江省「P37、D（P11）」のように、Pの数が合わないのは、上述したことであるが、パンペリー著の『地質学的調査』は、産地は、『大清一統誌』以外に各省の地理誌からも採録していることによると思われる。

［例 10］［山西省］の「銅鉱」で、『別表』の、「KIAU（chau）（解州）Copper（銅）in twelve localities（十二箇所）．Silber（銀）in NGANI（hien）（安邑縣）．In PINGLOH（hien）（平陸縣）silver（銀）in several localities（数箇所），copper（銅）in forty-eight localities（四十八箇所）」は、『大清一統志』の「山西省解州］［土産］の、「隋書地理志安邑縣有銀冶唐書地理志解州有銅穴十二平陸縣有銀穴三十四銅穴四十八」と一致している。

［例 11］［山西省］におけるIron「鉄鉱」について、英字はパンペリーの『別表』の産地名、［　］内はD『大清一統志』の産地名を示すが、下記のように一致している。Taiyuan（Fu）［太原府］In Taiyuen（hien）［太原县］and Yutes（hien）［榆次县］、Pingyang（Fu）［平阳府］In kiuhyu（hien）［曲沃县］．Yutsung（hien）［翼城县］．Yoyang（hien）［岳阳县］．Kih（chau）［吉州］．Hiangning（hien）［乡宁县］．……。

(d)『鉱産志』と『大清一統志』

［例 12］『鉱産志』の［浙江省］の「銀鉱」「處州府」には「各縣俱出，按舊志，

土産銀鉛，各縣並有坑，今久經封禁。」とあり、『大清一統志』の「處州府」の［土産］に、「銀鉛各縣俱出」「按舊志土産銀鉛各縣並有坑今久經封閉」とあり、同じ内容が書かれている。が、『地名表』や『別表』にはない。『鉱産志』は直接『大清一統志』に材源を求めたことが伺える。

［例 13］『鉱産志』の［浙江省］の「海塩」の産地数は 8 であるが、S『地名表』とP『別表』にはなく、D『大清一統志』には 7（「塩場」を入れると 11）が有り、この 7 が採録されている。これらのことは、K『中国鉱産志』が直接D『大清一統志』を閲覧し材源としたことを示す。ただ、『大清一統志』の［関隘］には「塩場」が「紹興府」の「山陰縣」「会稽縣」「肅山縣」「余姚縣」にあり、これらの 4 産地は『地名表』や『別表』にも、『鉱産志』にも記載がなく、『大清一統志』の産地を『鉱産志』は網羅したとは言い難い。

［例 14］『鉱産志』［山西省］「鉄鉱」の「平陽府臨汾縣」、「平陽府汾西縣」、「平陽府洪洞縣」は『地名表』や『別表』にはなく、『大清一統志』には「平陽府」［土産］に「鉄出臨汾洪洞汾西霊石郷寧吉州等處」とある。また、［湖北省］「銀鉱」で、『鉱産志』は「武昌府江夏县」とあるが、『地名表』や『別表』にはなく、『大清一統志』［土産］には「銀　唐書地理志鄂州江夏郡貢銀武昌有銀元和志鄂州開元貢銀」とある。これらのことから、『鉱産誌』は『大清一統志』を直接閲覧し、採録していることが伺える。

［例 15］『鉱産志』には、『大清一統志』が「旧書」から採録したことを示す説明がある。たとえば、［甘粛省］「硝石」で、「庆阳府各县俱出。《元和志》：有窟一所，在会州北一百里，朱家办课」とあり、『大清一統志』にも、「庆阳府 土产 焰硝各县俱出。元和志有窟一所在会州北一百里朱家嘴办课」とある。しかし、『地名表』や『別表』にはこのような説明はなく、『鉱産志』に「旧書」からの説明があるのは『大清一統志』から直接引用したことが伺える。

［例 16］［山西省］の統計は、K101，S65（K63），P67（K63，S63），D71（K67，S51，P54）である。K101 の内S（K）の 63（62％）がKに採録され、その材源は『大清一統志』や地方誌である。また、D71（K67）はD71 の内Kの産地と一致するDの数が 67 で、D71（S51）はD71 の内Kの産地と一致するSの数が 51 で、これはKに採録済みであるので、（K67）－（S51）＝ 16（16％）が直接『大清一統志』から採録したことになる。『地名表』の材源は『大清一統志』などであるので、合

わせて 62％+16％＝78％が『大清一統志』などから採録したことになる。式で表すと、K101・100％＝S（K63・62％）+D（K67・66％）−D（S51・50％）＋残り 22・22％になる。残り 22 は、「五（3）」で説明するが、「地方誌」や新しい資料に拠ったのであろう。残りが 0 で、式が完全に成立するのは、19 種内 11 種もある。同じように式で表すと、［浙江省］は、K71・100％＝S（K35・50％）+D（K39・55％）−D（S17・24％）＋残り 13・19％になる。『鉱産志』71 は『地名表』から 35 の 50％、『大清一統志』などから 22 の 31％、結局『大清一統志』などから 57 の 81％を採録している。［銀鉱］は、K147・100％＝S（K60・41％）+D（K112・76％）−D（S51・35％）＋残り 26・18％になる。『鉱産志』147 は『地名表』から 60 の 41％、『大清一統志』などから 61 の 41％、結局『大清一統志』などから 121 の 82％を採録している。［炭鉱］は、K154・100％＝S（K57・37％）+D（K33・21％）−D（S28・18％）+R（K36・23％）−R（S10・6％）＋残り 66・43％になる。『鉱産志』154 は『地名表』から 57 の 37％、『大清一統志』などから 5 の 3％、結局『大清一統志』などから 62 の 40％、『略論』から 26 の 17％合わせて 57％を採録している。

しかし、『鉱産志』は『大清一統志』から網羅したとは言えない。『大清一統志』には「旧産銀」「今未聞」「經久已廃」「今封閉」などでは鉱脈は尽きたのか、手掘りの限界か、出水によるものなのか、風水等の事情によるのかどうかなどがわからず、採録してよいのかの判断はむずかしい産地は多い。また、『大清一統志』には明らかにあり『鉱産志』にはない産地もある。たとえば、『鉱産志』［浙江省］「海塩」には「紹興府」についての記載がなく、『大清一統志』の［関隘］には 4 産地の「塩場」の記載がある。このように、『大清一統志』にはあるが、『鉱産志』にはない産地がいくつか見られ、網羅したとは言い難い。

［例 17］当時、18 省の鉱産物とその産地については、中国地質学の第一人者であるリヒトホーフェンといえども限定的な資料しかなく、結局、『地名表』の材源は『別表』で、『別表』の材源は『大清一統志』で、元の元は『大清一統志』になり、古来から受け継がれてきた旧書や地方誌を集大成した『大清一統志』に頼らざるをえなかった。

それから、主要には結局『大清一統志』が元の材源であるからには、始めから『大清一統志』から採録したのではという考えが生じてこよう。しかし、『鉱産志』の『例言』で鉱産物の所在は多く外国人の資料から採録したと述べていること、

『中国鉱産全図』の材源がパンペリーの『清国主要鑛産頒布圖』で、データで言うならば『鉱産志』の主要な材源はパンペリーの『別表』であって、その『別表』に拠った資料が『地名表』であること、『地名表』が 18 省別、金属と非金属別、各種鉱産物別に産地を列挙する形式が『鉱産志』と同じであること、「五（2）（オ）分析（a)」「K『鉱産志』とS『地名表』」での例から、『鉱産志』は先に『地名表』の方から採録したと考えられる。

注釈

(1) 唐弢编『鲁迅全集补遗续编』、471～590 頁、上海出版公司 1952 年。
(2) 拙論『周樹人《中国地質略論》(上)』、71～80 頁、『中国言語文化研究』第 19 号、佛教大学中国言語文化研究会 2019 年 8 月。『周樹人《中国地質略論》(上)』、1～22 頁、『中国言語文化研究』第 20 号、佛教大学中国言語文化研究会 2020 年 10 月。
(3) 周献本『《中国矿产志》版本资料』、『鲁迅研究月刊』2012 年第 5 期、北京鲁迅博物馆。
(4) 刘书友『鲁迅与《中国矿产志》』、『沧桑』1995.10.15。
(5) 郭志坤『《中国矿产志》和鲁迅早期自然科学思想』、『杭州大学学报（哲学社会科学版)』1978 年。
(6) 唐弢编『编校后记』、942 頁、『鲁迅全集补遗续编』、上海出版公司 1952 年。
(7) 叶淑穗、杨燕丽『关于新发现的鲁迅地质佚文的说明』、7、8 頁、鲁迅博物馆『鲁迅研究月刊』1991 年第八期。张锋、姜贵善『关于新发现的鲁迅地质佚文历史价值分析考证』、9～13 頁、鲁迅博物馆『鲁迅研究月刊』1991 年第八期。
(8) 李何林主编鲁迅博物馆鲁迅研究室编『鲁迅年谱第一卷（增订本)』、81～187 頁、人民文学出版社 2000 年。
(9) 鲁迅『《朝花夕拾》《琐记》』、297 頁、『鲁迅全集第二卷』、人民文学出版社 1981 年。「到第三年我们下矿洞去看的时候，情形实在颇清凉，抽水机当然还在转动，矿洞里积水却有半尺深，上面也点滴而下，几个矿工便在这里面鬼一般工作着。」以下『鲁迅全集』は 1981 年版を用いる。
(10) 徐友春主编『民国人物大辞典增订版下』、2836 頁、河北人民出版社 2007 年。
(11) 顾琅『中国十大矿廠调查记』、8 頁、商务印书馆 1916 年初版。
(12) 明治 34 年（1901 年）11 月 11 日発令「文部省直轄学校外国人特別入学規定」(『官報』第 5508 号明治 34 年 11 月 11 日)。「第一條　外国人ニシテ文部省管轄学校ニ於テ一般学則ニ依ラス所定ノ学科ノ一科若ハ数科ノ教授ヲ受ケントスル者ハ外務省在外公館又ハ本国所在ノ外国公館ノ紹介アルモノニ限リ特ニ之ヲ許可スルコトアルヘシ」。
(13) 竹内好編『魯迅著訳書目録』、273 頁、『魯迅選集第 13 巻』岩波書店 1964 年。
(14) (6) に同じ、941、942 頁。
(15) 唐弢编『重订鲁迅著译書目 著译部份』、904 頁、『鲁迅全集补遗续编』、上海出版

公司 1952 年。

(16) 周遐壽『魯迅的故家　第三分　魯迅在东京　一四　同乡学生』、174、175 頁、人民文学出版社 1981 年。

(17) 沈瓞民『回忆魯迅早年在弘文学院的片断』、44 頁、『魯迅生平史料汇编第二辑』天津人民出版社 1982 年。

(18)『中国鉱産全図』の左下欄外に、「光緒三十二年閏四月十五日印刷　光緒三十二年閏四月二十日發行　編纂兼繪圖者　顧琅」（上海魯迅紀念館編『上海魯迅紀念館蔵文物珍品集』上海古籍出版社 1996 年）とある。

(19)（6）に同じ、927 頁。「全図未見」とある。

(20) 刘书友『魯迅与《中国矿产志》』、59 頁、『沧桑』1995 年。

(21)（17）に同じ、44 頁。

(22) 魯迅『魯迅日记』、2 頁、『魯迅全集第 14 巻』。

(23) 周树人、顾琅共著『中国矿产志』『例言』、5 頁、陈漱渝编『魯迅科学论著集』人民文学出版社 2012 年。以下『中国矿产志』はこの『魯迅科学论著集』を用いる。

(24) 拙論『周樹人《中国地質略論》（下）』、1～3 頁、『中国言語文化研究』第 20 号、佛教大学中国言語文化研究会 2020 年 10 月。

(25)（24）に同じ、3～7 頁。

(26) 周树人、顾琅共著『中国矿产志』『导言』、19、20、21 頁。

(27) 周树人『中国地质略论』、8 頁、『魯迅全集第八巻』『集外集拾遗补编』、人民文学出版社 1981 年。

(28)（26）に同じ、20、21 頁。

(29) 地質調査所地質課『清国及韓国主要鑛産頒布圖説明　附清国主要鑛産地名表』、157 頁、『地質要報 15（1）』、1902 年。

(30) Raphael Pumpelly『中国、モンゴル、日本における地質学的調査（Geological Researches in China, Mongolia and Japan, during the years 1862 to 1865.』、55 頁、Making of America Books 1866 年。

(31)（30）に同じ、56、57、58 頁。

(32)（30）に同じ、59 頁。

(33)（30）に同じ、60、61 頁。

(34)（30）に同じ、123、124、125 頁。

(35)（30）に同じ、124 頁。

(36)（30）に同じ、109 頁。

(37)（30）に同じ、109～118 頁。

(38)（29）に同じ、158～188 頁。筆者が閲覧した資料には「広東省・広西省・雲南省」がなかった。

(39) Raphael Pumpelly（ラファエル　パンペリー）『Across America and Asia（アメリカ、アジア横断）：notes of a five years' journey around the world, and of residence in Arizona, Japan, and China』、New York Leypoldt & Holt, 1870. 巻頭の「Mercator Chart, Showing the Author's Route」に著者の旅程が示されている。